

自分自身をどう考え、どのように感じているか、という自己概念はその人の行動に大きく作用することが知られており、被服行動においても自己概念との関連が期待されている。しかしながらアメリカにおける研究では、被服に対する態度や行動と自己概念との結び付きは必ずしも一致した結果を与えていない。その理由の一つは自己概念を構成する因子が多数あり、どの因子が被服行動と関連するかを知ることが困難であるからである。さらに本研究でとりあげる被服の関心度にも多くの因子があり、両者の結び付きを一層複雑化している。しかし、こうした複雑な現象も多変量解析によって処理できるようになっており、ここではその多変量解析の一つである正準相関分析を用いて被服の関心度と自己概念との関係を検討した。被服に対する種々の側面からの関心度を測定する33の意見項目からなる被服の関心度測定尺度を作成した。自己概念測定尺度は長島貞夫らおよび遠藤辰雄らの作成したものを利用した。被服の関心度、自己概念測定尺度への被験者の反応結果を因子分析し、それぞれの尺度に関して各被験者の因子得点を求め、これをインプットデータとし、被服の関心度の6因子と自己概念の各因子がどのように関係しているかを正準相関分析した。その結果、長島らの自己概念との関係では、自我強度が低い人は保守的な服装を、外向的な人は仲間に同調した服装をする傾向のあることがわかった。また、遠藤らの自尊感情との関係では、社会的場面において不安をおぼえる人はあまりおしゃれをしない、他者からの評価を気にする人は保守的な服装を、自己の価値観が低い人は慎み深い服装をすることが示された。